

科学論文を書くに当たって

嶋 倉 道 郎

最近日本語が乱れていると言われている。典型的なのが「ら抜き言葉」即ち「食べられる」を「食べれる」と言ってしまう類の過ちで、最近はこのような言葉を聞いても、違和感を持たない人も増えているようである。逆に「さ入り言葉」というのもあって、これは「読ませていただく」を「読まさせていただく」と言ってしまう類の過ちで、敬語を使いこなすことができない若者などが安易に使っているうちに、次第に広まってしまったようである。最近では話し言葉のプロとも言うべきテレビのアナウンサーでも、誤った日本語を話すことが多い。例えば「汚名を挽回するために」などと平気で口にする。身近なところでも、学生が書いた記述式試験の答案を読んでいると、誤字は当たり前と言ってもよいくらいで、明らかに設問の意味をよく理解していない解答や、日本語の態をなしていない稚拙な文章を目にすることが多い。

なぜこんな話を持ち出したかという点、いろいろな学会誌で投稿論文の査読を頼まれることが多いのだが、科学論文として最低限必要な、論旨が明快でない文章に遭遇することがあるからである。科学論文の目的は、研究成果を誇張なく正確に世間に伝えることであろう。その伝達手段として言語があり、文字が存在するわけである。ただ日本語はもともと、明確な断定を避けて余韻を残すような表現法が好まれ、俳句や和歌などに代表されるように、書き記された語句の裏から色々な意味を汲み取ることができるのが名文とされる。したがって我が国の国語教育を受けた人達は、もともと曖昧さを残した文章に慣れてしまっているとも言える。一方欧米における国語教育では、客観的な事実と主観的な意見の区別を徹底的に教えるそうである。例えば「ワシントンは米国の初代大統領である」というのは客観的な事実である。しかし「ワシントンは米国で一番偉大な大統領である」というのは主観的な意見であって事実とは言えない。我が国ではこのような教育はほとんどなされていないので、普段から客観的事実と自分の意見とを分けずに文章を書いている人が多い。実はこれは科学論文を書く場合には最も避けなければならないことである。

では分かりやすい論文を書くにはどうしたらよいかということになるが、まずは学会誌など自分の専門分野の論文を多く読んでみることである。物事を習う場合には全て、まず巧みな人のやることを真似ることから始まる。するとすらすらと頭に入って読みやすい論文と、さっぱり分からなくて読みにくい論文のあることに気付く。そこで読みやすい論文はどのように書かれているか、また逆に読みにくい論文はなぜ読みにくいのか、自分なりに分析してみるとよい。例えば一つの文の長さはどの位か、漢語と大和言葉は

どの程度の割合で使われているか、文と文を繋ぐ接続詞の使い方は適切か、文の語尾にいつも同じ述語が使われていないか、などは簡単に確認できる。次に自分で何かテーマを決めて文章を書いてみる。このとき書きっ放しでは意味がなく、何日か置いた後に自分の書いた文章を見直すのがよい。すると手直ししたい部分が必ず目に付いてくるはずである。さらに良いのは一度英訳してみることである。英語は構文がしっかりしており、特に書き言葉で主語が略されるなどということはほとんどない。従ってすんなり英語に訳せるような文章は、誰が読んでも分かりやすい文章ということになる。よく論文を投稿するときには、まず全く専門外の知人に読んでもらって、内容が理解できるかどうか確かめてから投稿するのがよいと言われる。科学論文を書く場合には文学的に名文である必要はないが、誰もが理解できるような分かりやすい文章を書く必要があることは、肝に銘じておかなければならない。

(奥羽大学歯学部歯科補綴学第 I 講座)